

ポストモダンな 学びのスケッチ (4)

繋がりの中で見えてくるもの

北村真也+中村正

これは、筆者である北村がたまたま大学院に学び、そこでたまたま指導教員であった中村先生に出会ってしまったことで描き始められた終わることのない学びのスケッチである。論文課題を抱えていた筆者は、毎週のように中村先生と2時間の対話の時間を重ねていた。それはいつの時もほぼ正確なリズムをそれぞれの生活世界の中に刻むかたちで行われた。金曜日の夜、場所は衣笠キャンパスの研究室もしくは朱雀キャンパスのカフェ。そしてこの対話の時間は、いつしかそれぞれの生活世界全体にある特有の意味を構成することになっていった。

この感覚は、実に不思議な感覚だった。そもそもこの対話は、論文指導の一環であるオフィスアワーという名目で始まった。それは学生である筆者が、指導教員である中村先生から何らかのアドバイスを受けるためのものであった。しかしこの対話が〈指導〉というフレームを超えるのに時間はかからなかった。筆者のための指導が、二人にとっての学びの時間にとって代わったのである。ここでの学びは、ライブである。W.ベンヤミン流に言えばまさに〈アウラ〉なのである。出会い頭に何かが生まれ続けていくような世界。この場のこの瞬間にしか生まれ得ない気づき、変容、そして学び。私の学びと中村先生の学びの輪郭が解け始め、共有された学びになり、その学びがこの対話の場を超えてそれぞれの生活世界に溶けだし、そこに変容を生じさせていく。そんな過程が、特有の意味世界を構築するのだ。そんなわけで、今日もまた二人の学びの時間が重ねられていく。それは決して答えの出ない学びであり、予定調和でない学びの世界。しかし、決して閉じることのない開かれた学びの世界。そんな世界を少しでも感じていただければ幸いである。

エピソード「省察的な視野の中で」

前回の中村先生との対談で、この対談そのものを番外編としてエピソードに登場させることが提案されました。これまでにボイスレコーダーで対談を記録したファイルが6個あったので、私はそれをエピソード番外編として、ピンクの紙にプリントして今回に臨みました。

「今回は、わりと忠実にテープおこしをしましたよ」

「ちょっと、こんなこと言っていたかなあと思っ
て少し気恥ずかしくなりました」

「いろいろ、いいキーワードをだしていました
ね。あらためて感心しましたよ」

「これやってみてどうでした？私は、読んでみ
てなかなかおもしろいなって思ったんだけど…」

「おもしろかったですよ。でも、こんな風に話
されていたんだと、あらためて発見したことも多
かったですよ。自分がいかに聞けていないことに
気づかされました」

「私も、こんなこと言ったっけって、忘れてい
るんですからね」

「味付けになっていいですよ。この番外編が
…」

「こういうことでしょ？」

「そうそうそう、だから多元的ストーリーが重な
り合っ
て物語ができていくということがよくわかり
ますよね。そして、この話を題材にしてさらに
誰かが、塾長に話していく場面が書いてありま
したね。“塾長は、いつもこんな風に中村先生に突っ
込んでいくのか”って…、これが、何と言うのか
…、さらに二重のらせん構造になっていく」

「実は、その続きもあるんです。この番外編を
私の連れ合いが読んで、さらに対話が始まってい
く。つまり私と中村先生との対話の上位に位置す
るメタ対話です」

「それは、おもしろい。いつもそんな話をする
の？」

「そうですね。よく話をしますよ。だいたい、
大学に行くことを強く勧めたのは、私の連れ合い

ですから…」

「そうだったの、で、どうして大学院に行け
たことになったの？」

「もっと、外の世界へ出て行ってほしかったん
でしょうね」

「北村さんに、出ていってもらいたいというこ
と？」

「いやそうじゃなくて、今のままではアウラの
教育は、亀岡という地域にしか還元されない。そ
うではなくて、もっとこの教育を多くの人たちに
理解してほしいというのが、きっと連れ合いの考
えだと思います。中村先生が、前回言われたでし
よ、“私は、いつも縁が好き”だって、“縁にいる
と自分を異化してくれる出会いがある”って…。
私は、その縁になかなか行かないんですよ。触手
は絶えず伸ばすんですけど、決して自分は動か
ない。そんな頑固なところがあるんです」

「だから、大学院、行けって…、おもしろいな
あ」

「この前の先生との対談を読んで、そこが先生
と私の違いだって言うんですよ。動きが違うって
…」

「そう言われれば、私はよく動くよな…」

「“多動”なんですよ」

「そう、“多動”なんです」

エピソード番外編、これを書いたおかげで、
私の連れ合いまでが私と先生との対談の内容に登
場することになりました。このエピソードは、果
たしてどこまで広がっていくのでしょうか。でもよ
く考えれば、それは私の生きる世界の広がりであ
り、それを文章化していくことで、あらためて私

自身がその広がり気づいていったのかもしれませんが。

「あと、“コトバの厚みが違う”って言ってましたね。先生のコトバは、とにかく厚い。だから“もともと本を読み”って言うんですよ」

「それどういうこと？」

「たぶん、私のコトバは、まだまだ直接的だということだと思うんですよ。まだ十分に内面化されていない。コトバが浮いている。そんな感じだと思います」

「でも、教育のことを語ってる北村さんのコトバは、十分厚いと思いますけどね」

「そうですね」

「私には、見えないものが見えるわけですから、北村さんには、それだけの語彙があるんでしょうね」

「あとね、先生との出会いは、“何か『運ばれてきた出会い』のように感じる”って、言ってましたね。どこか、天の采配みたいだって…」

「なるほどね…。じゃあ、奥さんとの対話もこのエピソードに番外編として入れませんか？今度は、青の紙でね。カラフルでいいんじゃない」

「いや、私も書こうかなって、一瞬思ったんですけど、それを書いてしまうと、ますます広がってしまうかなって…」

「もうでも、ここまで聞いたら、北村さんがここにいることに奥さんが深く関係していることがわかったんですから、登場人物としてはいりませよ」

「書くんですか？」

「ぜひ書いた方がいいと思いますよ。北村さんのリアリティーとしては、抜かせないんじゃないの。親密で重要な他者からストロークがあって、何か必然性があるわけだから…。これ前言いましたかね『偶然なる出会い』とか『計画化された偶然』とかいう話…」

「知りません」

「『計画化された偶然』というコトバがあるんですよ。“Planned Happens”って言うんですがね。これはまさに、『計画化された偶然』なんですよ。偶然のように見えるけど、それは出会うべくして出会ってるんでね。だからそれは、あらかじめ出会うように仕組まれている。当然、近い関心の中で動いているんでね…」

「でもそんなの、私の周りにいっぱいありますよ。みんなつながってるんです。バラバラな出会いなんてない。みんな必要な出会い。ほとんど分断できない」

「だから奥さんを登場させてくださいよ。青い紙でね」

分断できないつながり。確かに偶然の出会いなんて本来ないのかもしれない。すべては関係性の中に存在する。大切なことは、その関係性そのものに自覚になること。関係性に気づかないと、それは分断され、ただバラバラにコトがおこっているだけになってしまう。

「エピソードの中に、銀行にいったS君の話ありましたね」

「あれは、生徒じゃないんです。ただ外回りで、定期的にあうらに来てくれている担当者です」

「卒業生じゃないの？」

「違いますよ。ただの銀行の人…」

「業者なの、そんな人にも、いろいろ話しているの。大変優秀な国立大学の…、これ卒業生じゃないのね。それは、触手伸ばし過ぎだわ…」

「ついつい話してしまうんです。いや、なんかしんどそうにしてたから…」

「これ、おもしろかったなあ…。卒業生へのサービスしてるんじゃないんだ」

「違うんです」

「ここおもしろいですよね。こういう言い方…」

「どういう言い方？」

「“どんな意味があるのかなって思うんですが、銀行協会の試験を受けさせられるんです” そう思った段階で受けなくていい理由を探し出しているんですよ、こういう人ってね…。使ってる側からすると、今を一生懸命生きて行ってほしいんですよ。今を一生懸命生きれない人間が、未来を一生懸命生きれるはずがない。だから幹部候補生になんてなれないんですよ。もうこの段階で投げますよね。有能な管理職なら、すぐわかりますよね」

「格好いいですね」

「ということを北村さんは言いたかったんでしょうね。北村さんは、このS君の様子からどこか直観的に感じるものがあつたんでしょうね。だから、話し始めるんでしょうね」

「でも、それは生徒たちも同じなんです。何かといえば文句ばかり言う子がいるじゃないですか」

「いるね」

「教え方が悪いとか、教材が悪いとか、自分ができない言い訳ばかり考えている。こんな子は、なにやってもあかん気がしますね。与えられたものをどう使うのかとか、目の前に置かれたものをどう処理するのかとか、そんなことが大切なんです。だから一緒なんです、生徒たちもS君も…」

「たぶんよく似てるでしょうね。そういうところにパッと目がいくんでしょう。だから出入りの業者であっても捕まえるんでしょう。言いたくなるでしょ、なんかいろんなことを…」

「北村さんにとって、巻き込みたくなる人とそうでない人がいるんでしょう？」

「そうですね」

「その判断基準は、何なの？誰でも巻き込むわけじゃないでしょ」

「私にとってのプライオリティーは、“純粋さ”かもしれない…」

「“純粋さ”ってどこで判断するの？目つき、話し方、コトバ使い、仕事ぶり…？」

「何で感じているんだろう…」

「何かあるんでしょう？」

「私は、テレビなんかを見ていて、涙が出てくる場面があるんです。それは、ひたむきに一生懸命何かに取り組んでいる人たち…。特に、長い間一生懸命に何かに取り組んでいるんだけど陽の目を見なかった人が、ようやく陽の目を見るようになったその瞬間に感動するんですよ」

「なるほどね」

「“一生懸命さ”、“純粋さ”これって私自身にとっても、とても大切なことなんです。人間そのものが好きなんですよ…」

「このS君は、“不思議な森”に迷い込んできたんでしょうね…」

私がS君に見たもの、それは以前私がK先生に見たものと重なり、さらには生徒たちにも重なっています。いやあるいは私自身にも重なっていくのかもしれない。次から次へとモノが与えられる消費文化の時代、それはいとも簡単に目の前を投げ出したり、諦めたりすることによって成り立っている社会がそこにあるのかもしれない。そんな社会に生きる私たちにとっての精一杯の抵抗は、そのつながりを自覚することかもしれません。そしてそのつながりは、今この瞬間の私たちの目の前にあるのです。アウラという不思議な森において、私は様々な人たちと出会い、そのつながりをあらためて確認する。そんなことが、私の日常の中に起こっているのかもしれない。

「この番外編を書いてみて、どんな印象を持ちました？」

「そうですね。あらためて中村先生ってすごい

なあと思いました。次から次へと切り返していく」

「それは、北村さんが引き出してくれてるんですから…。私からすれば、私からいろんなものを引き出す北村さんってすごいなあと思ってしまいます」

「対話ですね」

「そう対話です」

「私は、よくアウラの生徒にも話をします。大学の先生から1のことを要求されれば、私は3返してみようと思うって。例えば、1冊の本を読むように言われれば、必ずその周辺の本を2,3冊は読む。1の要求に対して1返すのでは、それは先生の想定内ではない。私は3返すところで、先生の想定外の反応を見たいんです。ギリギリのところ、生まれてくるもの。予定調和の中では決して生まれないもの。それが、おもしろい」

「教師は、いつだっていい生徒によって鍛えられるんですよ」

「そう思いますよ。その通り。だから私は子どもたちによって鍛えられてきたんです。私は、いつだって“学習者”としてアウラに関わってきたように思うんです。生徒たちやスタッフの先頭に立つ学習者、それが私の私自身に対するイメージなんです」

「なるほど」

「最近、“塾長は大学の先生みたい”って生徒から言われるようになりました。もちろん、彼らは大学の先生を知っているわけではないのですが、結構何人かの生徒はそう言いますね」

「それは、北村さんがいろんな関係を再現しているから、大学の教師らしく見えるんですよ。それは、見えますよ」

「だんだん中村先生みたいに思考が立体的になってきているように思います」

「“多動”なんですよ」

「私の中で“知性”というのは、固定化された情報ではないんですよ。常に新しく生まれくるも

の。それが“知性”なんです。だからいくら有名な先生であっても、私との対話の中で、その瞬間に新しい“知性”を生じさせられる人でないと魅力を感じないんです。動きがないと化石みたいに感じるんです」

「だから大学でも、私はよく質問するんです。こう言ってみたら、どう返してくるんだろう？あるいはここまで言ってみたら、どういう答えが返ってくるんだろう？って、いつもそう思いながら質問するんです」

「だから、そこで問いを発しているんですよ。いい学生、いい学習者だから…。問いがやっぱりうまいんですね」

「先生にも、動きがほしいですよ。何か新しい動きが…」

「でも、嫌な学生かもしれないって一方では思うんですよ」

「そんなことはないですよ」

「でも、中村先生はおもしろい。何か必ず返ってくる。新しいものに出会わせてくれる。だからおもしろいんです」

「北村さんが、どんどん突っ込んでくるもん」

「先生の奥にあるもの”っていったい何なのだろうって、思うんです。前に山岳部の話があったでしょ。これは、私の中村先生への興味から生まれた問いの中で出てきた話でした。“先生の中に何があるんだろう”っていう…」

「それは、子どもたちのことにもよく現れますよね。北村さんの思考がね…。その子どもの中に何があるんだろうって…。だからどんどん巻き込んでいくんでしょうね。それは、通常の塾や学校の先生と生徒の関係を超えていますよね。前回もらったアウラのチラシの中にもよく出てましたね。装丁も大変きれいなんですけど、そういうメッセージがよく出てましたよ。生徒たちのレディネスがそこで育っていく。何か森の力があるんでしょうね。よく伝わってきましたよ」

「あのチラシで生徒は集まってくるんですが、今年の生徒募集は今までとは違うような感じがするんです」

「何が変わったんですか？」

「アウラの入会には、面談と体験というプロセスがあるんですが、その初回の面談で必ず言うことがあるんです。それは、“あなたには選択の権利がある”ということ。学校ならそこに行かなければならないけれど、塾はそうじゃない。アウラの他にも選択肢がいっぱいある。“来たかったら来ればいいし、来たくなければ来なくていい”このことはとても大切なことなんです。子どもや親に選択の権利が保障されているから、私たちは自由に自分たちの教育をおこなうことができる。最初に合意が必要なんです。そのことをずいぶんはっきり伝えられるようになったかもしれません。それから大学の話もよくしますね。たいていの親は、学校に入学するまでのことしか考えていない。でも大切なのは、入学してから。子どもがその学校でどう学び、どう生きていくかということ。そんな話もよくしますね。入会の前から、啓蒙しているのかもしれない」

「そうですね」

「それから、体験をしてもらうんですが、たいていの子どもは、“楽しかった”とか、“集中できた”とか、“時間が短かった”とか、そんなことを言いますね。ただ一人で学んでいただけなのに…」

「違うんでしょうね。何かが…」

今日の対話かここで終了となりました。こんな風に対話を続けていけばいくほどに、私はより中村先生に出会っていているように思います。そしてそのことは同時に私がより私に出会っていくことなのかもしれません。先生との対話の場面で、私は私なりの学びを表現し、そこで表現された学びは、アウラの実践に影響をもち、それを記述したエピソードが再び先生との対話の媒介となります。この循環が、まるでらせん階段のように進行しているのかもしれない。

「学びのモードというか、森の中は、違う世界なんです。だから、学びのモードが変わってしまう」

「なるほど…」

「アウラの色をはっきり伝えられるようになったかもしれないね」

「核心を深めてますね」

「言語化するということは、そういうことだと思います。言語化することでより深みが生まれていくんです」

番外編の記述は、私にとってこのエピソード記述している私自身にさらなる省察的な視野を与えることになったのだと思います。アウラの日常を、森の中で日々繰り広げられるそこに関わる人たち、もちろん私も含めてですが、その変容を言語化することで様々な新しい発見が生まれます。そしてそれを先生との対談というかたちで相対化し、それを番外編として記述していくことで、さらなる変容が私自身の中に起こっていくような気がします。もちろん、こうした私の中で生じた変容もまた、森の中へと返っていくのですが…。